

わたしにまかせて

「えっと、ガスとじまり、おふろのでんげん、シャッターにせんたく…でOKだよね？」

わたしは聞かれて答えました。

一宮西部小・2 ながさか わか

「どうしてなの？」

おばあちゃんが手じゅつと入いんをすると聞いて、わたしのむねがドキッとしました。おばあちゃんは、いつも元気でいつしょにあそんでくれていたからです。そして小さなときからわたしがかぜをひいたりするとおばあちゃんは、すぐにおみまいに来ててくれていました。そんなおばあちゃんが入いんすると聞いて、さみしくなりました。心ぱいにもなりました。

「ねえ、わーちゃん、おねがいがあるんだけど…。」

おばあちゃんがそう言いました。

「え、なあに。」

わたしは答えました。おばあちゃんがつづけて言いました。

「入いんの間、じいじに夜、とじまりのチェックの電話をしてく

れる？わーちゃんならまかせられるの。おねがいできる？」

わたしは、おばあちゃんに聞かれてすぐに答えました。

「うん、まかせて！わたし、おしごと大好き。」

おばあちゃんの顔が明るくなつて、言いました。

「よかつた。じやあ、おねがいね。これでんしん、あんしん。」

わたしも「つしご」とができてうれしかつたです。

家にかえると、わたしは、おかあさんとじいじにかくにんする」とを書き出しました。お母さんが、

じいじのかくにんリストができました。わたしは、おばあちゃんにもかしてあげたいと思いました。おばあちゃんが入いん中にさみしくないように、うさぎのぬいぐるみをプレゼントすることにしました。

「でもなにか足りない気がする。」

わたしはそう思い、レジンでおまもりのネックレスを作り、うさぎのぬいぐるみにつけました。そしてぬいぐるみに名前をつけました。「うーん、どうしよう。あつ！ そうだリリーにしよう。」

おばあちゃんの家にもつていくと、おばあちゃんはすぐ気に入ってくれました。

つぎの日、入いんの日がやつてきました。わたしは、その夜から一週間、毎日電話をしました。夜八時が電話の時間です。

「もしもし、じいじ、いい？」

「はいはい、いいよ。」

「チェックするよ。まずガス。それから、それから、…。」

「はいっ、はいっ、はいっ、できるよ。しまつた、できてないっ！」

「つぎは？」

「おしまいだよ。おやすみ。」

「はいはい、おやすみね。」

それから一週間たちました。さいごの七日目。

「まい日ありがとう、わーちゃん。」

とおじいちゃんが言ってくれてうれしかったです。

つぎの日、おばあちゃんはリリリーをつれてたいいんしてきました。

わたしは、

「おかえり。ぶじにおわってよかつたね。」

と言いました。

「うんっ。ばあばもうれしい。おじいちゃん！」

わたしは、これからも人のやくに立つし」とをたくさんしたいと思いました。よろこんでもらえてうれしかったからです。し」とは、わたしにまかせてください！